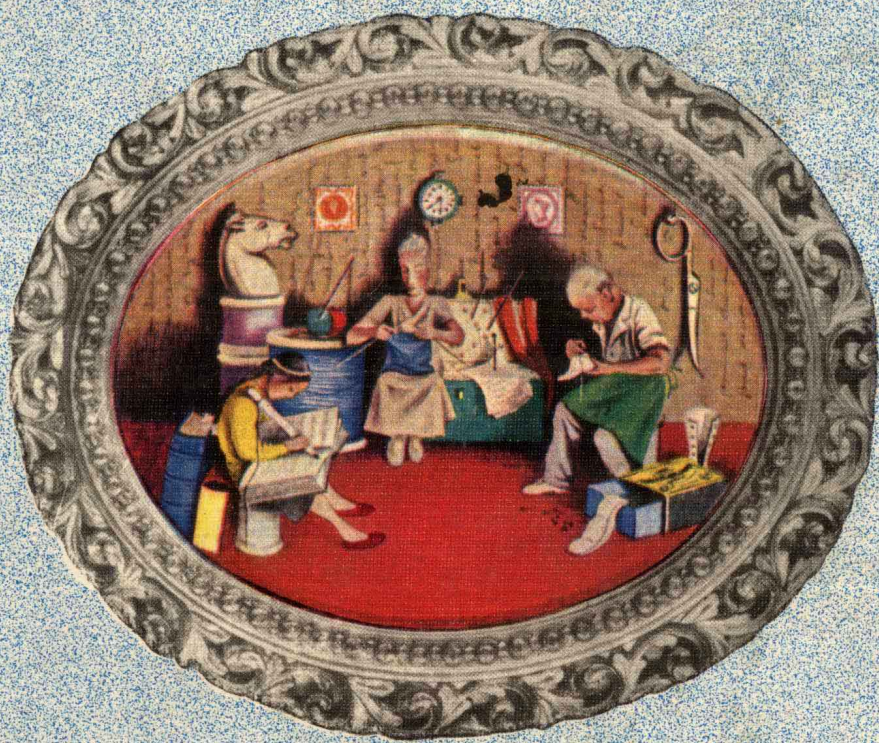


床下の小人たち

メアリー・ノートン作 林 容吉訳



岩 波 書 店

ノートン, メアリー

933 床下の小人たち

岩波書店 1969

246p. 22cm(岩波ものがたりの本103)小学5・6年～中学以上

(参考) Norton, Mary : The Borrowers.
1952.

岩波ものがたりの本
103

■床下の小人たち

定価七〇〇円

一九六九年四月二十四日 第一刷発行©

一九七三年九月二十日 第六刷発行

訳者 林 容吉

発行者 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五

岩波雄二郎

印刷者 長野市中御所二ノ三〇 田中忠

発行所 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五

株式会社岩波書店

本文印刷 大日本法令印刷株式会社

製本 株式会社松岳社

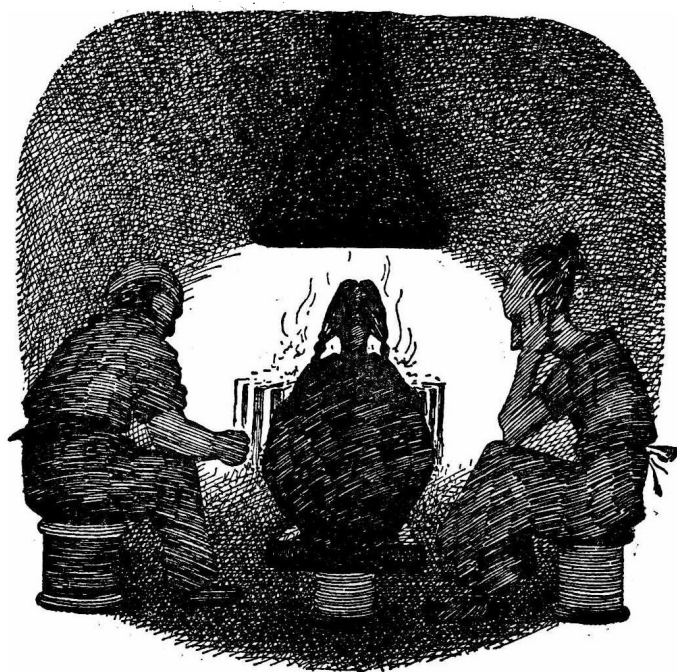
表紙・箱印刷 錦印刷株式会社

床下の小人たち

メアリー・ノートン作

林 容 吉 訳

岩 波 書 店



THE BORROWERS

by Mary Norton

Illustrated by Diana Stanley

1952

Original English language edition

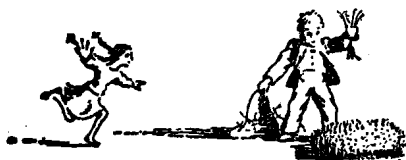
published by J. M. Dent & Sons Ltd.

This Japanese language illustrated edition is published
by arrangement with Savile Publications Ltd. and
J. M. Dent & Sons Ltd. through Hughes Massie Ltd., London
and Charles E. Tuttle Co. Inc., Tokyo.

も
く
じ



15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
屋根があく	嘆くホミリー	返事	古いアナグマの巣	手紙	サクラの木の下で	男の子	アリエッティ走る	大時計の下から	あこがれ	借り暮らしの人々	ポッド《見られ》る	わたし借りにいけるわ	アリエッティの日記	メイおばさん
166	156	144	132	124	110	100	92	80	66	51	40	35	23	11





20 19 18 17 16

訳者のことば	野に逃げる	いぶし出し	ぼくは借り暮らしだよ	発覚	黄金時代
.....					
246	234	216	201	190	180

さし絵
ダイアナ・スタンレー

ゆかした
床下の小人たち

メアリー・ノートン作
はやし
林 容 吉 訳



この話を、はじめて、わたしにしてくださったのは、メイおばさんでした。いえ、わたしにはないのです。わたしなんてはずはありません——らんぼうで、ぶしょうで、わがままな小娘^{こむすめ}、こわい目つきで人をにらんんだり、歯^はぎしりをするなんていわれていた、わたしなんですから！ ケイト、たしか、そんな名まえの人でした。ええ、たしかにそうです——ケイトです。といって、その名まえに、なにか重要^{じゅうよう}な意味^いがあるというわけでもないのです、ただ、その子が、このお話に顔^{かお}をだすというだけなのです。

1 メイおばさん

メイおばさんは、ロンドンにあるケイトの父母ふぼの家に、二部屋へやをつかって住すんでいました。たしか、親類しんるいにあたっていたのだと思います。寝室しんしつは二階かいで、居間いまは、その家で「朝あごはんの間ま」とよばれていた部屋へやでした。いったい、朝ごはんの間まというものは、朝、トーストやマーマレードのうえに、陽ひのさしこんでいるときは、いいものですが、ひるすぎになると、もうなにか影かげがうすくなるようで、みようにしらじらした光、こうした部屋へやにつきものの、あわい光がみちてくるように思われるのです。そして、そのときには、部屋へやに、ある種しゆのかなしさといったものが、ただようのですが、ケイトは、子ども心に、そのかなしさがすぎでした。そこで、ちようどお茶ちやの時間じかんになるころ、よくメイおばさんのところへ、そっとはいっていつて、おばさんから、かぎ針ばりの編あみかたをおそわるのでした。

メイおばさんは、年としをとっていつて、節々ふしふしもかたく、そして——きびしいというのとはすこしちがうのですが、そのかわりに、けっこう、しんにすっかりしたところがありました。ケイトは、メイおばさんにたいして、らんぼうなふるまいをしたり、また、だらしないことをしたり、わがままをいったりしたことは、いちどもありませんでした。そして、メイおばさんは、かぎ

編みのほかに、いろいろのことを教えてくれました。毛糸を卵型にまるくまくのは、どうやったらいいかとか、いろいろの縫いかたや、つくりのしかた、それから、ひきだしの片づけたかや、また入れたもののうえに、つるつるしたうすい紙を一枚、おまじないのようにかけて、ほこりを防ぐ方法などを、おしえてくれました。

「仕事は、どこへおやりだい？」と、ある日、床においたクッションのうえに、背中をまるめて、だまつてすわっているケイトに、メイおばさんがききました。「ぼんやり、すわっていちや、いけないね。舌をおなくしかい？」

「いいえ、」と、ケイトは、くつのボタンを手でひっぱりながらいいました。「編み棒をなくしたの。」ふたりは、寝台かけをつくっているのです——毛糸を四角に編んでつなぎあわせるのですが、まだ、あと三十ほど編まなければなりません。「おいたところは、わかつているんだけど、」と口早に、ケイトはことばをつづけました。「寝台のすぐわきの、本棚のいちばん下の段へおいといたのよ。」

「いちばん下の段？」と、メイおばさんは、くりかえしました。手にもった編み棒が、暖炉のあかりをうけて、たえまなく、きらきら動いています。「床に近いのね？」

「ええ、」と、ケイトがいました。「でも、床は見たの。敷き物のしたも、どこもかしこも。だって、毛糸はちゃんとあるのよ。ちゃんと、おいたところに。」



「おやまあ、」と、メイおばさんが、かるく声をたてました。「まさか、この家にもいるんじゃないだろうね！」

「なにが？」と、ケイトがききました。

「借り暮らしの小人たちがさ。」メイおばさんは、そういつて、うすあかりのなかで、かすかにわらったようでした。

ケイトは、すこしこわそうにして、目をみはりました。そして、ちよつと間をおいてききました。

「そんなもの、いるのかしら？」

「どんなもの？」

「どんなって、人間にんげんでしょ？　ちがう人間にんげん、家のなかに住すんでいて……いろんなものを、借か

りていく……」

メイおばさんは、仕事しごとの手をとめてききかえました。

「あなたは、どう思うの？」

「わからないわ。」と、ケイトは、くつのボタンをつよくひっぱりながら、いいました。「いるはずないと思うけど、」——ケイトは顔かおをあげました——「だけど、ときどき、きつというと思うことがあるの。」

「どうして、そうお思いだい？」と、メイおばさんが、ききました。

「だって、いろんなものが、なくなるんですもの。たとえば、安全ピンあんぜんね。工場こうじょうでは、どんな安全ピンあんぜんをつくっているでしょ。そして、みんな、まいにちのように安全ピンあんぜんを買かってるわ。それなのに、どういうわけだか、さあいるというときには、一つだってないんですもん。いったい、どこに、みんなあるんでしょう？　いま、こうしてるとき、どこへ、いつちやうんでしょう？　針はりだって、そうだわ。」ケイトはつつけます。「おかあさまが、いままでに買かった針はりは、きつと、何百にもなるわ。それが、みんな——あれば、そのへんにあるはずじゃなくって？」

「そう、そのへんにね——」と、メイお婆さんは、あいづちをうちました。

「まだまだ、いろんなもの買^かってるわ。なんべんでも。鉛筆^{えんぴつ}や、マツチや、封ロウ^{ふうろう}や、ヘアピンや、びょうや、ゆびぬきや——」

「それに、帽子^{ぼうし}どめのピンや、すいとり紙なんかもね。」と、メイお婆さんが口をはさみました。「ええ、すいとり紙もね。」と、ケイトもうなずきました。「だけど、帽子^{ぼうし}のピンはそんなことないわ。」

「ないことがあるものかね。」と、メイお婆さんはいって、仕事^{しごと}をとりあげました。「帽子^{ぼうし}ピンには、ちゃんと、わけがあったんだから。」

ケイトは、びっくりして、「わけ、ですって？」と、ききかえました。「だって、——どんな、わけ？」

「そう、二つわけがあったね、たしかに。帽子^{ぼうし}どめのピンは、身^みをまもるのに、たいへん役にたつし、それに、」——メイお婆さんは、きゆうにわらいました——「みんな、まるでばかりしいことさ。しかも、」——と、いいしぶって——「ずいぶん、昔^{むかし}の話だからね！」

「いや、話して。」と、ケイトが、いいました。「どうして、帽子^{ぼうし}ピンのこと、知ってるの？ お婆さま、見たことあるの？」

メイお婆さんは、おどろいてケイトの顔^{かお}を見て、「もちろんさ、だって——」といいかけま

メイお婆さん